

町史

とっておきの話

284

福島県植物研究会会長

うすば
薄葉

みつる
満

ただみ水田雑草考 ⑤

― 防除の厄介な水田雑草 ―

クログワイは、中空のストローに似た茎を束生し、地下に小さなイモのような塊茎をつけるカヤツリグサ科の植物で、只見町では調査した田んぼ4筆に1筆程度の割合で全町的に見られました。塊茎の寿命が長くかつ芽の数が多いう特性が防除を厄介にしているのですが、かつて京都大

学にいた小林央往さんは、溜池のクログワイが形成した塊茎は春に二斉に発芽するのに対し、田んぼのそれは長期間にわたってバラバラに発芽することを明らかにしました。なるほど、そうすれば田の草取りや除草剤でいつぱんに全滅させられることはないわけです。稲作の長い歴史に培われた雑

草としての生き残り戦略について感心してしまいます。したがって、耕作者の立場からいえば、時期を変えた複数回の除草作業が必要だということになります。除草剤だけに頼らず、秋の田起こしを励行し塊茎を乾燥と低温にさらして越冬個体をできるだけ少なくするのも考でしょう。

最近増えてきた雑草にマメ科のクサネムがあります。高さ1m以上、茎は太くて硬く稲刈りの障害になり、収穫後の玄米に種子が混入して品質を落とすこと

もありません。今のところ伊南川流域に限られています。今後は只見川流域でも見つかるかもしれません。バラバラになった果実が水流や農業機械あるいは水鳥の足などに付着してひろがると考えられますので果実が落ちない

うち、また発生したら1本、2本と数えられるうちに引き抜き焼却することが大切です。休耕田はとくに発生しやすく、二度刈り払っても切株から再び繁茂してきますので、根絶には2回以上の作業が必要になります。いま全国的に問題になっているのが除草剤に対する抵抗性個体の出現です。スルフォニルウレア系の一発除草剤は低毒性、選択性、残効性に優れていることから広く使用されるようになりましたが、毎年同じものを使い続けたために、雑草の遺伝子の塩基配列が

変わらなくなり、除草剤の効きにくい個体が出てきたのです。福島県ではコナギ、オモダカ、イヌホタルイ、タケトアゼナ、アゼトウガラシなどにそのような個体が報告されています。それらを外見で判別するのは難しく生化学的な検定が必要になります。毎年除草剤を使用しても特定の種類の雑草がなくならない、あるいは急激に増えてきたときには抵抗性個体に注意してみてください。そうならないためには、ときどき除草剤の種類を変えることが大切です。



▲クログワイ(2012.9 只見)



▲クログワイの塊茎(越冬芽)



▲クサネム(2012.9 楡戸)



▲クサネムの果実(莢と種子)